

# 全胚凍結を適応する

## 卵巣刺激法、移植胚段階および患者年齢の検討

— マイルド刺激法による単一初期新鮮胚移植は依然、有効である —



○長池 未郷, 中原 裕子, 朝倉 寛之  
医療法人愛生会 扇町ARTレディースクリニック

### 目的

近年、凍結融解胚移植の妊娠効率の向上により、採卵後の全胚凍結が普及していると考えられる。しかし、凍結胚移植が新鮮胚移植より有益である治療状況は明らかではない。我々は、マイルド卵巣刺激法下の新鮮および凍結単一初期胚移植周期の治療結果を、患者年齢層毎に比較検討した。

### 対象・方法

2011年1月-2017年9月にクロミフェン+FSH/hMGおよびアンタゴニストを用いたマイルド刺激周期による単一初期新鮮胚移植を行った762周期(新鮮胚移植群)および、自然排卵もしくは経皮エストラジオール補充周期による単一初期凍結融解胚移植を行った454周期(凍結胚移植群)を対象とした。両群とも天然型プロゲステロン錠200-300mg/日と経皮的エストラジオール投与を行った。

新鮮胚移植群および凍結胚移植群の年齢を【34歳以下, 35-39歳, 40-42歳, 43歳以上】に分類し、各年齢層における妊娠率、着床率、流産率および継続妊娠率を比較した。

統計処理には、コクラン=マンテル=ヘンツェル検定(BellCurve社エクセル統計)を用いた。

データ解析は、倫理に配慮して行った。

### 結果

#### ①新鮮胚移植群および凍結胚移植群の患者背景

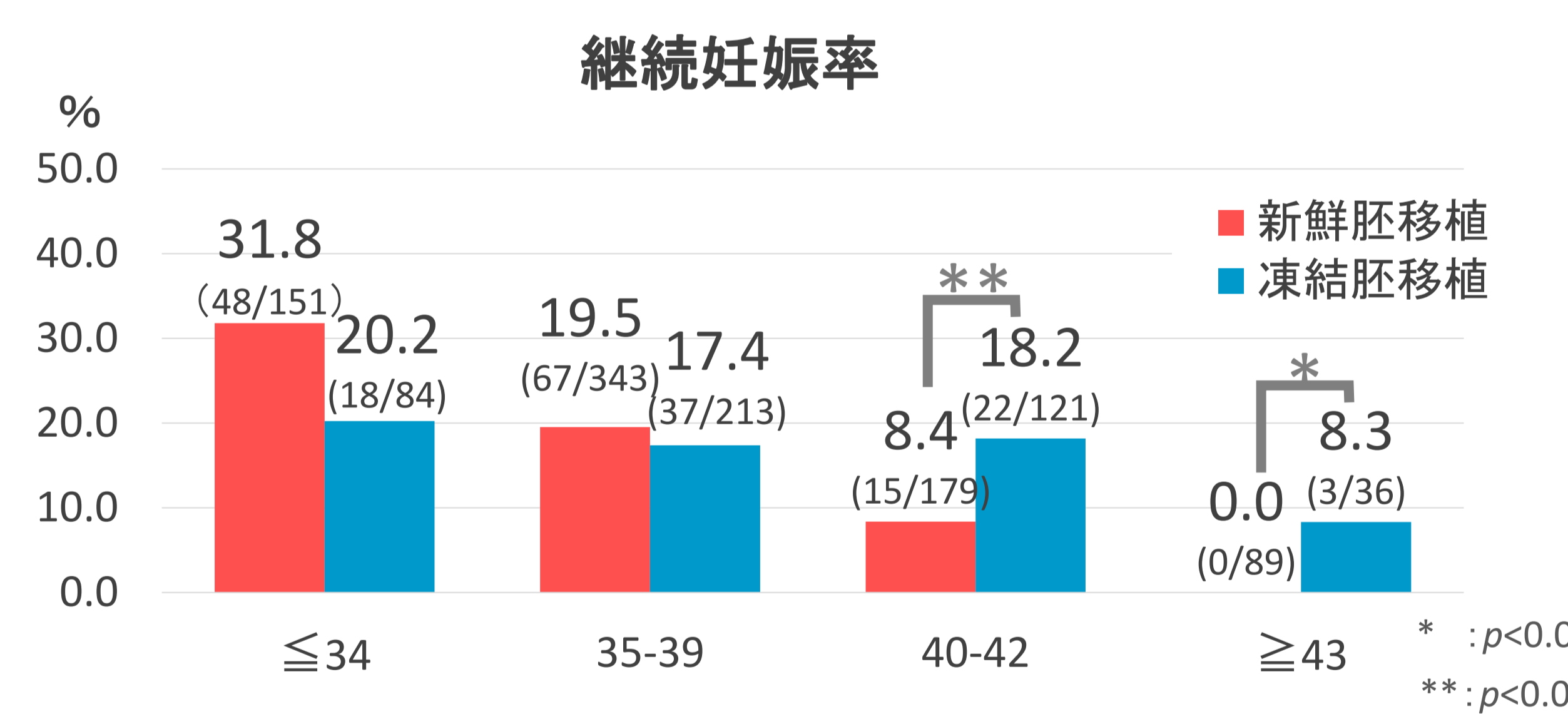
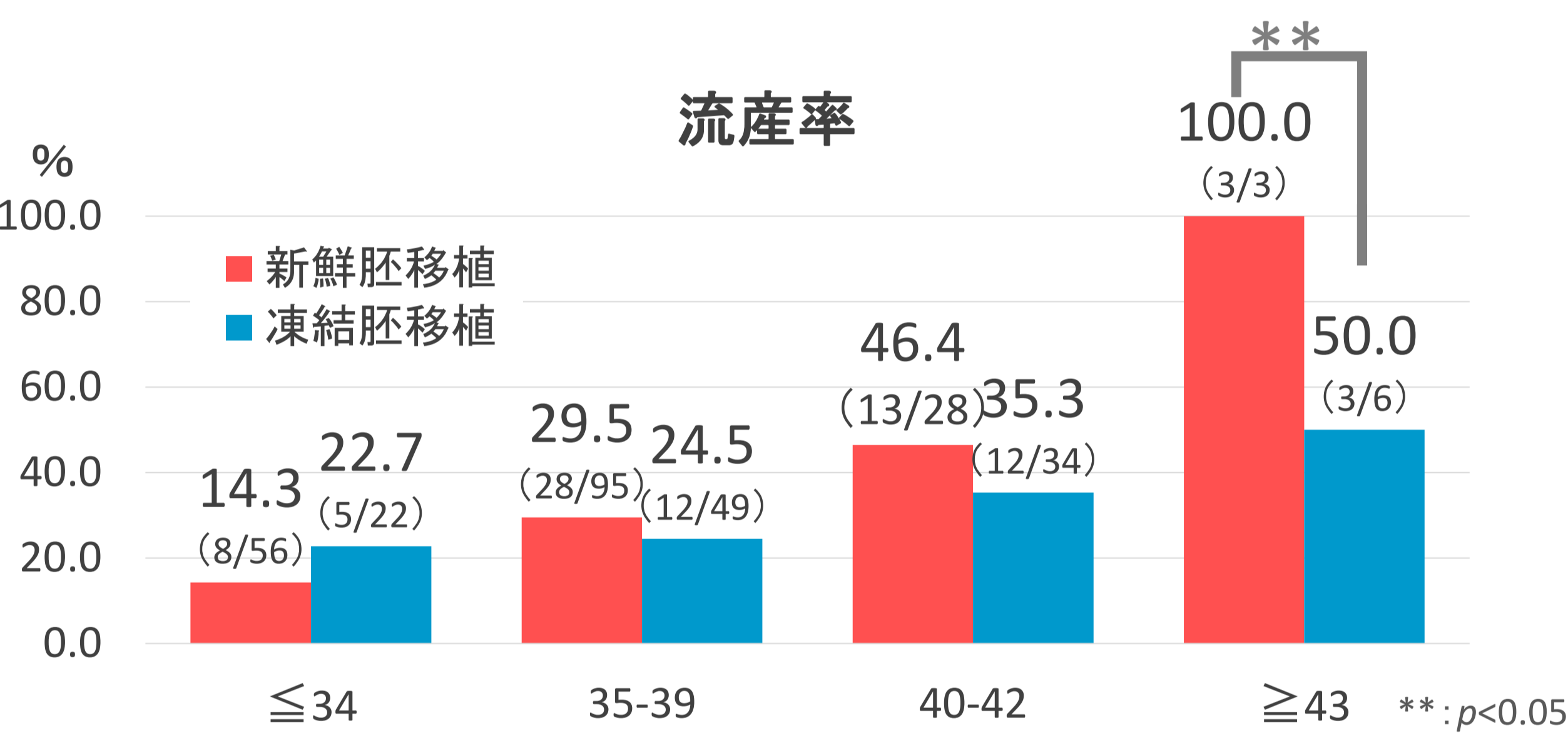
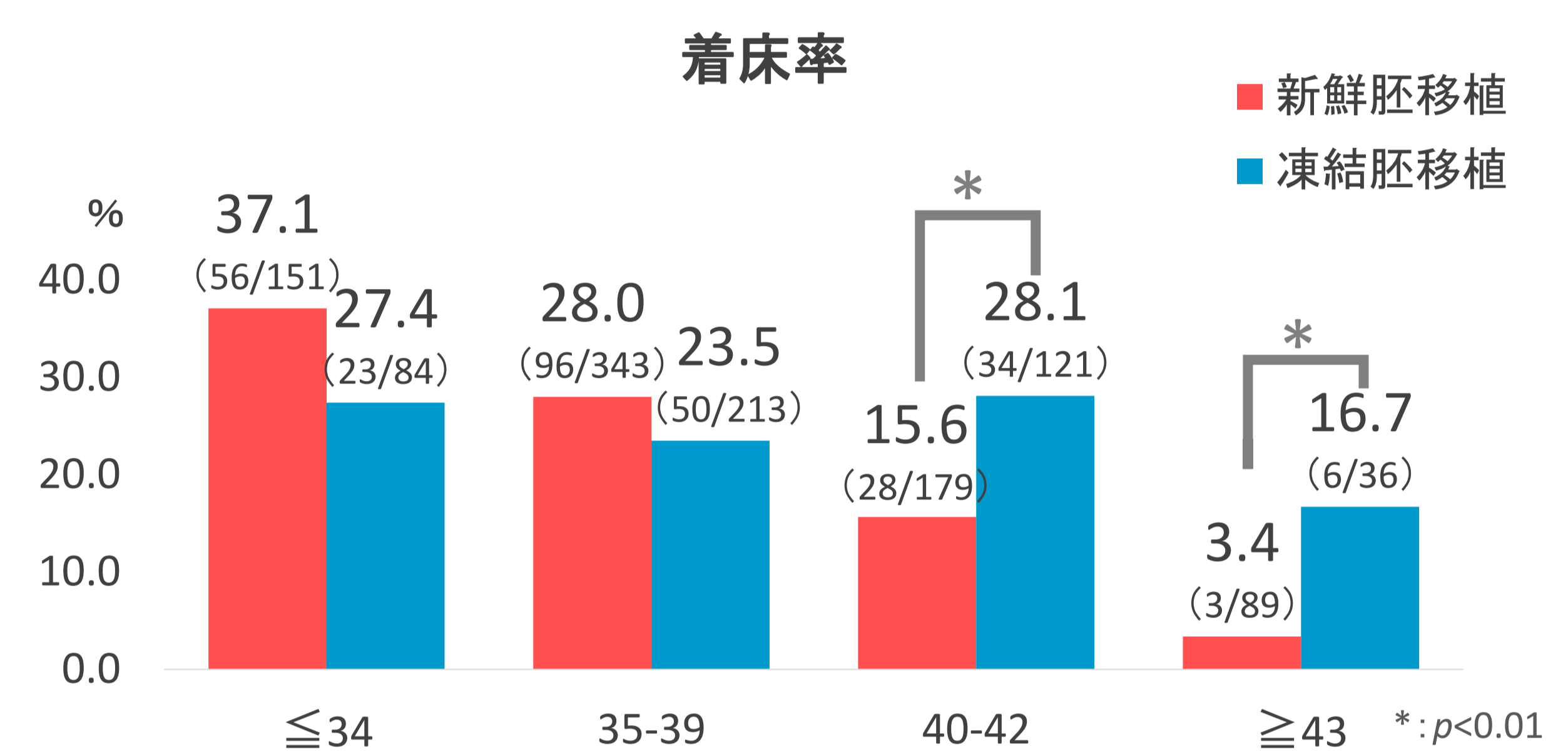
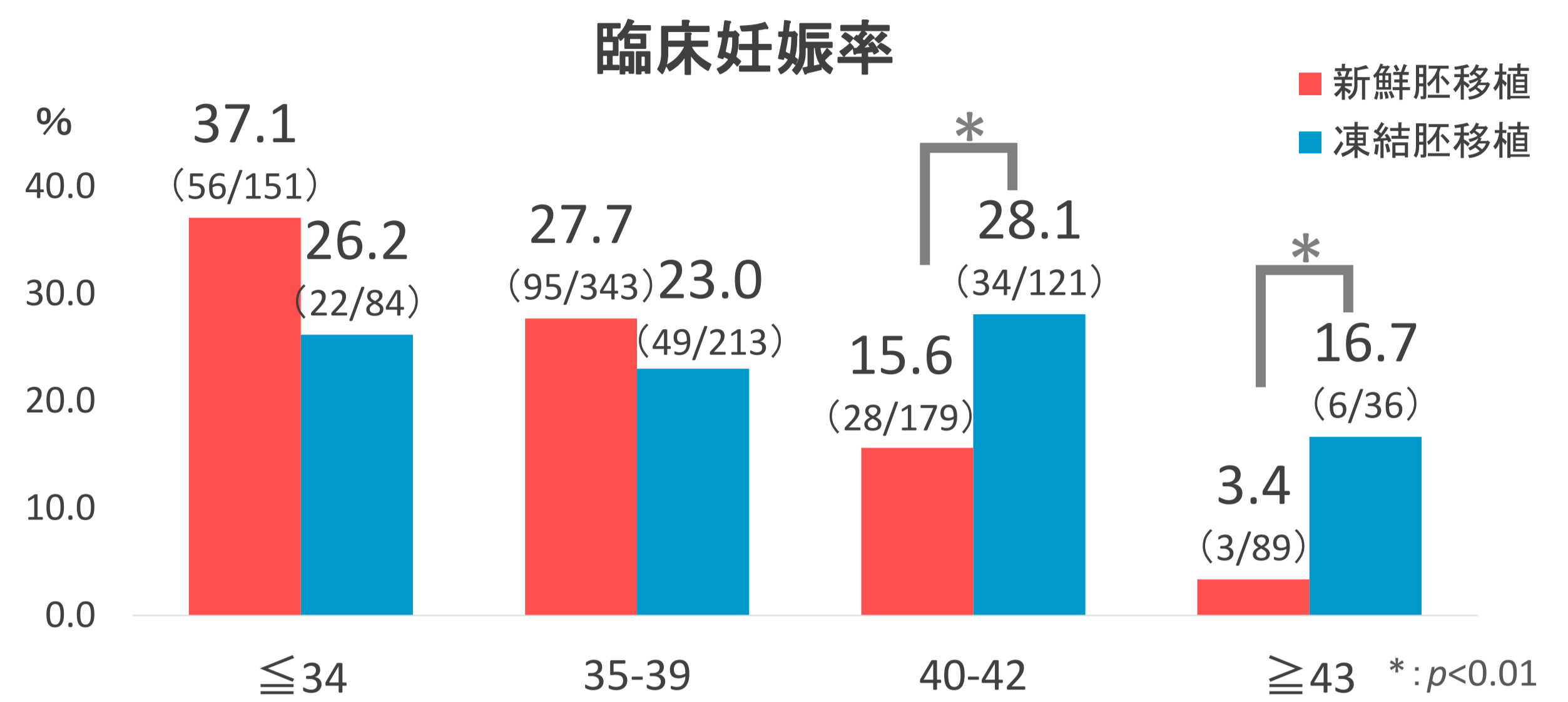
新鮮胚移植	≤34	35-39	40-42	≥43
周期数	151	343	179	89
平均AMH (ng/ml)	4.6±3.4	2.7±2.7	1.9±2.3	0.8±0.7
平均移植回数	1.2±0.6	1.4±0.8	1.7±1.5	3.3±2.5
総移植回数	151	343	179	89
妊娠数	56	95	28	3
着床胎嚢个数	56	96	28	3
流産数	8	28	13	3
臨床妊娠率(%)	37.1	27.7	15.6	3.4
着床率(%)	37.1	28.0	15.6	3.4
流産率(%)	14.3	29.5	46.4	100.0
継続妊娠率(%)	31.8	19.5	8.4	0.0

凍結胚移植	≤34	35-39	40-42	≥43
周期数	84	213	121	36
平均AMH (ng/ml)	4.0±2.7	2.5±1.9	1.7±1.5	1.3±1.2
平均移植回数	2.7±1.8	2.2±0.8	2.3±1.4	2.4±1.5
総移植回数	84	213	121	36
妊娠数	22	49	34	6
着床胎嚢个数	23	50	34	6
流産数	5	12	12	3
臨床妊娠率(%)	26.2	23.0	28.1	16.7
着床率(%)	27.4	23.5	28.1	16.7
流産率(%)	22.7	24.5	35.3	50.0
継続妊娠率(%)	20.2	17.4	18.2	8.3

私の今回の演題に関連して、開示すべき利益相反状態はありません。

### 結果

#### ②各年齢層の妊娠率、着床率、流産率および継続妊娠率の比較



- ◆ 臨床妊娠率および着床率は、40-42歳、43歳以上の年齢層で凍結胚移植群が有意に高かった。
- ◆ 流産率は35歳以上で、新鮮胚移植群が高い傾向にあった。
- ◆ 継続妊娠率は、40-42歳、43歳以上で凍結胚移植群が有意に高かった。

### 考察

臨床妊娠率、着床率および継続妊娠率は、39歳以下の年齢層で新鮮胚移植の方が同等または高い傾向にあった。しかし40歳以降では、凍結胚移植群が有意に高値であった。流産率は患者年齢に伴い上昇する傾向が見られた他、35歳以上では新鮮胚移植群が高かった。40歳以上での継続妊娠率は、凍結胚移植群が新鮮胚移植群よりも有意に高く、卵巣刺激による子宮内膜着床能への影響が予想された。このことからART周期における全胚凍結の適応は、卵巣刺激方法、患者年齢および胚の発育段階を考慮して検討すべきであると考えられた。